

カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 36

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.net>

July 1, 2008

巻頭言

———— 目次 ————

◆巻頭言	
「KY」な日本語.....楊曉捷	1
◆年次大会	
CAJLE2008 へのお誘い.....小室リー郁子	3
◆特集・CAJLE 創立 20 周年	
CAJLE20 周年記念によせて.....中島和子	4
CAJLE20 創立周年記念に寄せて.....川口義一	6
CAJLE の未来に寄せる期待.....鈴木美知子	7
◆寄稿	
第 19 回全カナダ日本語弁論大会を振り返って	
.....下野香織	8
◆リレー随筆	
外国人留学生の挑戦——アカデミック・ディ	
スコースの習得を考える——.....池田佳子	10
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	
.....清水道子、畔上ラム智子	11
BULLETIN BOARD.....大江都	13
編集部便り.....	14

「KY」な日本語

楊 曉捷

去る 4 月の終わりに東京での八ヶ月にわたる研究滞在を終えた。久しぶりに日本でじっくり腰を下ろして暮らしてみても、言葉の表現にもあれこれと見識が得られた。その中で印象深いことを一つあげるとすれば、恐らくやはり「KY 式日本語」にほかならないだろう。

カナダで生活していても、気づいた人が多いかと思う。「KY」とは、「空気が読めない」とのこと。言わば、その場の雰囲気や人々の感情には疎く、周りから浮いてしまう変わり者だという、人の性格についてのネガティブなレッテルだ。あえて解説するまでもないが、英語の略語の格好をしていて、英語の言葉とは関係なく、日本語をローマ字に書き換えたうえで、その頭文字を集めたものだ。もともとこのような言葉の作り方は、「KY」という一語から始まったものではなく、たとえば「NHK」だって、「日本放送協会」の頭文字だから、れっきとした「KY」語だ。ただ、そのような言語学的な議論とは関係なく、いまや「KY」を筆頭に膨大な数の言葉の一群が現われ、それも言葉遣いに自由奔放な若者だけではなく、大の大人やマスコミまで巻き込んでしまうのだから、シマツが悪い。

そもそも「KY」にスポットライトを当ててこれを一挙に表現の表舞台に引きずり出したのは、去年

の秋ごろに、いまから一つ前の内閣総理大臣についての捉え方としてマスコミがこの言葉を選んだことに始まった。それにより一挙に「KY」、そして「KY」のような言葉の存在が注目された。わたしが実際に出会った二つの事例を記しておこう。前後して会った二人の昔からの友人のことである。その一人は、研究一徹の頑固親父のイメージを地でいくような人で、ビールを飲み交わしたら、しみじみと中学生の息子さんに「KY」と揶揄され、空気に合わせるもんじやないと諭してやったとのエピソードを披露してくれた。もう一人のほうは、いつでも自己主張をはっきりしていて正論を張り、そのため学生に慕われるタイプの大学教師で、自分の教え子たちから、「KY」でいて、空気が読めないのではなくてそれを「読まない」と言われたんだよとにんまり。生きた言葉、そして機敏に富んだ言葉遣いがありありと伝わってくる会話は、何時まで経っても記憶に残っている。

「KY」語の妙味は、そのもっともらしい格好からは、とても簡単に想像が付かない意味あい、言い換えれば、字面と中味とのギャップだった。たとえば「AM」は「後でまたね」、「WH」は「話題変更」という辺りは、まだ無難で微笑ましい。「JK」(女子高生)、「DD」(誰でも大好き)は、洒落ていて感心してしまう。しかしながら、「MK5」(マジキレる5秒前)、「ATM」(アホな父ちゃんもういらへん)となれば、どう考えても内輪でしか通用できない隠語に過ぎない。このような言葉でまともな交流がで

きるとは、正常な感覚からすればとても考えられない。

ここに来て、日本の社会でのこのような言葉への対応が、むしろ興味深い。「KY」語が面白そうだと思ったら、もうりっぱな学者から大手の出版社まで一斉に取り掛かり、語学的な議論、文化論的な観察、はては「単語帳」「辞書」まで作りあげ、あっという間にそれを本屋に並べてしまう。けっして新しい潮流に乗り遅れまい、知らないで笑われたら堪らないといったような思惑が見え見えの構えだった。まさに日本風の大人の対応の典型であり、日本的な言語感覚、ひいては社会生活のバランスを覗き見できた思いがしてならない。

「KY」語とは、あくまでも一つの言語風景だ。紙上の空論だけでは始まらない。ならば、自分でも感覚が掴められるものかと、気楽に掛かって作文を思い巡らした。苦勞したあげく、つぎのようなものしか思い浮かばなかった。

「世の中はKY語がはやっているが、その使い方となればどれも「CB」(超微妙)でいて、「IW」(意味わかんない)。声掛けられても「HT」(話ついで行けない)、やっと分かったと思ったら、「TK」(とんだ勘違い)。いらいらして「MM」(マジムカつく)。無理するもんじやない。「TD」(テンションダウン)だ。お手上げだ。」

タイトルには、もっともらしく「日本語」と付けたが、実際は、はなはだ身勝手な「KYな日本語教師」にしかならなかったのかもしれない。

年次大会

CAJLE2008 へのお誘い

CAJLE2008 大会実行委員代表 小室リー 郁子

昨夏、緑の眩しいニュー・ブランズウィック州で年次大会が行われてから、まもなく1年が経とうとしています。CAJLE 創立 20 周年を迎える今年、その CAJLE が産声を上げた地トロントで開催することとなりました。カナダにおける多様な日本語教育を様々な側面からサポートし、日本語教師がお互いに刺激を受け、学べる場を提供してきたこの振興会ですが、無我夢中でペダルをこいでいた時代が過ぎ、会が大きく成長するにつれて、昨今は必死でそのペダルをこがなくてもこれまでの惰性でとりあえずは前に進める……、考えてみるとそのような状態にあるのかもしれない。創立当時のことを知る人も減り、当初の志にまで思いが及ばないことも出てまいりました。20 年というこの節目に、今ひとたび原点に立ち、これまでとこれからの振興会について皆様と考える好機にしたいと思っています。折しも、今年は日加修好 80 周年にあたり、今大会はそれを記念する行事の一つとしても登録されました。国内外を問わず、広く皆さまの参加と、そして積極的な議論を期待したいと思います。

さて、本年度年次大会は8月15日（金）から17日（日）の三日間、国際交流基金トロント日本文化センターにて開催いたします。大会テーマは「変わりゆく日本語と日本語教育の今」と題し、昨年、今年の年次大会のテーマ「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」を引き継ぎ、さらにそれを膨らませるものとなります。最近の日本語の変化は、外来語の著しい増加、また、男女差、年齢差、若者言葉、方言、（携帯）メールやブログ等の普及による書き

言葉とも話し言葉とも言い切れない日本語など、様々なところに及んでいます。またインターネットの普及により、日本語は一昔前とは比較にならないほど他の文化や言語からの影響を受け、それが日本語そのものの変化にもつながっていると言えるでしょう。変化の激しい日本語にどう対応し、現場においてそれをどこまで、そしてどのように反映させればよいのか、そういったことについても考えることができると思っています。20 周年を記念する今大会では、国際交流基金日本語事業部長・日本語グループ長としてご活躍の嘉数勝美氏をお迎えして基調講演を行う予定です。日本語教育の現場とそれをサポートする行政面双方のお話が伺える機会となるものと思います。

教師研修会では、待遇表現がご専門の一つである川口義一先生（早稲田大学）に「日本語教育における待遇表現の指導」について、また、人類言語学ご専門の James Stanlaw 先生（イリノイ州立大学）には“Japanese English: Language and Culture Contact”というタイトルでお話しいたします。

プログラムが盛りだくさんの今回は、パネルディスカッションも二つ企画しています。一つ目は、大会テーマをトピックにしたもので、嘉数氏、川口先生に加え、鈴木睦先生（大阪大学）、室屋春光先生（国際交流基金派遣 アルバータ州教育省）をパネリストにお招きし、大会二日目の午後に行う予定です。大会三日目に予定しております二つ目のパネルは、野呂博子先生（ビクトリア大学）に案内役を務めていただき、「日本語コミュニケーション教育に

おける演劇の持つ可能性を探る」という題で講演とディスカッションをお願いしています。パネリストには、平田オリザ先生（大阪大学、劇作家・演劇家）と橋本慎吾先生（岐阜大学）をお迎えします。どちらのパネルにおきましても、パネリストの先生方のみならず、フロアの皆様にも積極的に参加していただくことで、活発な議論が繰り広げられることを期待しております。

このほかに、例年と同様、研究論文発表も行われます。カナダ、日本、そしてアメリカから応募のあった中から 24 本の論文が採用され、日本語および日本語教育にかかわる論理的考察や実践報告、教材開発などの発表が行われます。また、日本語教育に関連する出版物や教材の展示販売も、例年通り実施する予定です。

招聘講師の方々ならびにパネリストの先生方、そして会員同士が交流を深めることができるように、大会二日目の夜には懇親夕食会を企画しています。昼間のプログラムのあいだに十分なお話ができなかった方々と、楽しい時間を過ごしていただければと思っております。また、大会終了翌日の 18 日（月）には、ナイアガラ瀑布とその周辺を巡る日帰りツアー（オプション）も計画中です。過去に同様のツ

アーに参加くださった方でも大いに楽しんでいただけるようプランを練っております。滝は時間帯によっても水量が大きく変わり、その日の天気次第で見える景色が異なります。二度目、三度目の方も、是非参加をお考えください。

大会の詳細、ならびに、宿泊、空港からトロント市内までの交通情報など、参考にいただけるような情報は CAJLE のホームページ（www.cajle.net）にも掲載しておりますので、そちらをご覧ください。

最後になりましたが、パネリストのお一人としてご紹介しました平田オリザ先生が、この CAJLE の年次大会プログラムとは別に、大会初日の夜をお使いになり、年次大会と同じ会場で特別講演をなさいます。国際交流基金・国際表現言語学会・CAJLE 共催で一般公開される予定です。どうかこのまたとない機会をお見逃しなく。詳細は後ほど CAJLE ホームページにてお知らせいたします。

8 月中旬は東京や大阪ではまだ夏の盛りでしょうが、トロントは朝夕冷え込む日が多くなります。ご出発前にインターネット等（<http://www.the-weather-network.com/>）でトロントの天候をご確認ください。それでは、開催地トロントでお目にかかるのを楽しみにしております。

特集・CAJLE 創立 20 周年

CAJLE20 周年記念によせて

カナダ日本語教育振興会初代会長、現名誉会長 中島 和子

カナダ日本語教育振興会（CAJLE）が 20 周年を迎え、今年の夏の大会がその記念の大会であると同い、感慨無量です。過去 10 年間ここまで CAJLE を育てられた歴代の会長をはじめ、会長を支えて会を存続

させて来られた理事の皆さん他多くの会員の方々に初代会長として、心から「おめでとうございます」、「ご苦労さまでした」と申し上げます。10 歳から 20 歳までよく育てていただきました。

振興会が立ち上がったのは、高度成長期が終わろうとする1988年、バブル崩壊寸前のころでした。23名の会員、そのうち13名が理事という状況で、つぎの4点を活動の柱に始まったまことにささやかな会でした。

- (1) 日本語教師の研修、新教師の養成
- (2) カナダにおける日本語教育に関する研究活動の興隆
- (3) カナダの日本語教師間の情報交換
- (4) 関連団体との交流

1990年にバブルが崩壊し政府の財政逼迫のもと、資金援助を得るのに毎年奔走するという日本語教育縮小時代でした。それでも上記(1)と(2)のために夏の「現職教師研修会」、春の「研究発表会」、秋の「公開講演会」とプログラムが目白押しにあり、しかも学習者の年齢の特徴を踏まえて、年少者部会、高校部会、大学部会、成人部会に分かれてさまざまな活動を行っていました。

当時は、まず組織づくりにエネルギーを傾けざるを得ず、法人化、NPO登録が1989年、(3)のためにニュースレターが発刊されたのが1990年、そして(2)のための紀要「ジャーナルCAJLE」創刊号の発刊が1997年でした。そのころを振り返って今一番記憶に残っているのは、1995年の振興会のロゴの誕生です。国際的に活躍されているトロント在住の児童画家、飛鳥童さんをお願いして、「渦」(エネルギーのぶつかり合い・求心力)と「視」(好奇心と創造力・サークルの輪)、という二つのロゴをデザインしていただきました。当時紀要には「渦」、ニュースレターには「視」でしたが、いつごろからか複視眼の「視」がニュースレターから消えてしまったようで、ちょっと寂しく思います。

その後の10年は、電子メール、ホームページを駆使するIT時代と言えますが、振興会の動きを改めて振り返ってみるためにニュースレターを通読してみました。正直言ってその発展ぶりにはびっくりしました。初めの10年で出来なかったこと、例えば、夏

の大会の持ち回りが実現されています。2003年にはカルガリー大学、2005年はヴィクトリア大学、2007年はニュー・ブランズウィック大学、そして来年はどこでしょうか。世界第二位の広大な国土を持つカナダでは、地域のニーズに応えるために持ち回りが必要不可欠であり、それが長い間の私の夢でもあったのです。第二は、振興会の知名度が上がり、世界各地から大勢の方々が研究発表に来られるようになったことです。カナダのみならず、世界各地の日本語教育研究に振興会が貢献をするようになったことは、大変悦ばしいことだと思います。

振興会に加えて、ATJ(米国日本語教師会)の理事として継承語部会を立ち上げ、日本で「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」を設立、これら三つの学会の活動を通して私が現在思うことは、学会には表向きの顔と水面下の顔があり、大会、ニュースレター、紀要は表の顔、その水面下にいかに多くの方々のエネルギーと汗、そして痛みがあるかということです。犠牲的精神のもと、会のために一致団結して尽力するという献身的な働きがあって初めて会が存続し得るのです。CAJLEが20年間存続できたのも、このような水面下で会を支えてくださった多くの方々の努力の結晶であることは間違いありません。もちろん、総領事館、国際交流基金、全加日系人協会、カナダ連邦・州政府、また牧野成一先生、富沢定利先生、村沢晃先生、川口義一先生、曾我松男先生など優れた講師の先生方のご支援、ご指導があったことも忘れてはなりません。

もう一点、私が三つの学会の活動を通して強く感じることは、カナダ日本語教育振興会が持っている、かけがえのないユニークな特徴です。それは、年少者、高校生、大学生、一般成人に教える日本語教師が一致協力して会の運営に関わっていることです。ちなみに、振興会の発起人として設立に尽力していただいたのは、カナダ東部日本語教育でもっとも長い歴史を誇る「トロント日本語学校」維持会の水藪幸治さん、「トロント国語教室」の学務担当理事の秋

田健司さんでした。そして、生まれたばかりの振興会をさまざまな形で支えてくださったのは、鈴木美知子先生、二木恭子先生、杉本陽子先生、清水道子先生、中尾良子先生、高橋和比古先生で、いずれも年少者の日本語教育に従事されている方々でした。

年少者の日本語教育が振興会の中心的役割を果たしてきたことは、とりもなおさずカナダの日本語教育の特徴とも言えます。国際交流基金からの派遣でアルバータ州教育省におられた宇田川洋子先生がニュースレター32号に書いておられますが、カナダの日本語学習者数は23,834人(2006年度基金調査)、そのうち学校教育(K-12、主に高校)関係が46%強、大学などの高等教育が約36%、そして日本語学校など学校教育以外が19%だそうです。この最後の民間の年少者対象の日本語学校等が世界平均12.2%と比較してかなり高く、「カナダの日本語学習が発展してきた大きな理由は、継承言語教育などで長い間カナダの日本語教育を守ってきた方々の努力の結果によるところが大きい」と指摘されています(p.7)。

カナダは、子どもの言語教育の宝庫です。やっと小学校5年生からの英語教育に重い腰を上げた日本とは対照的に、多文化主義法(Multiculturalism Act, 1988)のもと「母語剥がし、母文化剥がし」にならないように、幼児からの多言語習得を大事にする数少ない国の一つです。日本も少子高齢化が進み、労働力を外国人に依存せざるを得なくなり、多文化・多言語共生ということばが毎日のように新聞を賑わす時代になりました。外国人が持ち込む言語や文化を大事な言語資源とするカナダが、多文化・多言語共生社会の一つのモデルとして認識されつつあります。

このようなカナダの土壌にしっかり根を下ろし、世界各地から集まる日本語教育関係者を渦の中に巻き込んで大きな輪を作り出す拠点として、時代の要請に応じた新しいビジョンのもと、カナダ日本語教育振興会がさらなる10年に向けて第一歩を踏み出されることを願ってやみません。

CAJLE 創立 20 周年に寄せて

早稲田大学大学院日本語教育研究科教授 川口 義一

当方が始めて CAJLE の大会に参加したのは、1997年のトロントでの大会で、その中の「第10回現職教師研修会」の招待講師として「最新の日本語教授法」という題目で講演し、「文脈化」の概念を紹介し、comprehension approachでロシア語の模擬授業を行っています。この大会から、それまで春季に行われていた研究発表会と夏季の現職教師会、そして秋季行事だった公開講演会を一まとめにして一度開催することになったようで、そのために開催日が増え、連続五日間の大きな会になりました。

このときは、まだトロント大学においての中島和子先生が CAJLE 会長でいらしたのですが、先生ご編集の Japanese as a Heritage Language: The Canadian Experience はすでに刊行されており、当方は「あの継承語教育の中島先生」に研究室まで呼んでいただいて丁寧なごあいさつをいただき、大いに緊張したことを覚えております。

その次に当方が CAJLE に参加するためトロントを再訪したのが、なんと翌年の1998年で、それもふたたび教師研修会の講師として呼ばれ、「音声

教育理論と実習」「漢字の新しい教え方」「敬語をどう教えるか」の三つのワークショップを行いました。このときの「年次大会ご案内」には、当方のことが「皆様にすでにお馴染みの川口義一教授」と紹介され、面映い思いをしましたが、すでに前年の参加でフレンドリーな CAJLE の雰囲気にはほれ込んでいた当方といたしましては、「仲間にしてもらえた」という気がして、たいへんうれしかったものでございます。

その後の当方の CAJLE 参加記録を調べてみますと、2003年(カルガリー・研究発表)・2005年(ビクトリア・パネリスト／研修会講師)・2007年(ニューブランズウィック・パネリスト)のように、1年おきに会場がトロントでないときに参加して、カナダ旅行を楽しませていただいているという風情であります。この間、2001年には当時の編集責任

者の金谷武洋先生からのお誘いで機関誌 Journal CAJLE の査読委員にも加えていただき、また同年の早稲田大学大学院日本語教育研究科設立以降は、研究室の教え子に研究大会での発表を勧め、覚えている限り7名に口頭発表の機会を与えていただいたりしまして、当方と CAJLE の関係はますます深まってまいりました。

こうして、11年間続けて CAJLE に通わせていただき、気がつくとは今年が創設20周年の記念の年。この晴れの機会に、ふたたび研修会講師とパネルディスカッションのパネリストとしての参加を要請され、たいへん光栄に思うとともに向後さらに30周年に向けての CAJLE のご発展を祈る次第であります。当方も、研究と「余興」の腕を磨いておきますので、なにとぞ末永くお付き合いくださるようお願い申し上げます。

CAJLE の未来に寄せる期待

CAJLE 元会長代行 鈴木 美知子

1988年早春、参加者30名をもって、カナダ日本語教育振興会設立準備委員会が発足しました。どんよりと曇った日の午後であったことが思い出されます。そして6月、会員数23名で第1回年次総会が開かれ、CAJLEはその一歩を踏み出しました。この日からすでに20年という時間が過ぎ去ろうとしているとは夢のようです。

久々に創立10周年記念特集ニュースレター16号をひもとき、読み進むに連れ、高橋編集長を中心に、狭いオフィスにワープロを持ち込んで編集、発行作業をしていた時代のことが鮮明に蘇ってきました。

コンピュータ上の編集作業と違い、切り貼り作業などもあり人間臭く、手間暇がかかるだけに、出来

上がったものに寄せる愛着は一入でした。発送作業も部数が多く、いつも地元役員総出、一日掛かりでした。

が、10周年を境に CAJLE も理事／役員会が11年度を踏み出すとインターネット会議となり、理事が顔を合わせての会議は年次大会のときに限られるようになり、ニュースレターもすでにインターネット配信化されました。

会長もトロントを離れ、野呂博子(西部)・西島美智子(東部)・王伸子(日本)・大江都(東部)諸氏と、カナダ国内東西にとどまらず、東京からの会長指揮という運営期もあり、年次大会も2003年のカルガリーを皮切りに、隔年でヴィクトリア、ニュー・ブランズウィックと開催地が移動しました。

オフィスもすでに閉鎖され、各部会活動も、継続のためには新しい形態が求められる時が来ています。振り返れば、この10年もまたCAJLEは変遷し続け、止まることなく確かな足跡を残して来ました。

すでに日本語学校を引退したこともあり、2年前、18年間のCAJLE理事／役員を降り、インターネット会議の呪縛からも解放されて一会員となった私ですが、これから創立30周年に向かって歩み出すCAJLEに寄せる勝手な期待を二つ持っています。

その一つは、分科会活動をインターネット上で展開して頂けたらということ。特に継承日本語教育は、放置すれば70%は現地語に同化してしまうという運命にある戦後移住者の3世達が、続々と学齢期を迎える時が来ている現状を重視し、継承語教育に始まったCAJLEです。ここで原点に戻り、21世紀方式で継承日本語教育を盛んにして頂きたいのです。

もう一つは、5人の女性会長が、20年の歳月をかけてきめ細やかに基盤を固められた会です。そろそろ男性会長が誕生し、会に新しい息吹きを吹き込む

時の到来ではないかという期待です。

孫の誕生に始まった三言語育ての試みも、昨秋のある日、大きな交差点で信号待ちをしている時に消防自動車を通りかかったので、不用意に「あ、fire engine」というと、一歳半の孫は間髪を入れず「ショウボウシャ!」。「あ、ごめん、消防自動車だね」と、完全に一本取られたこともあります。言葉の使い分けも順調のようであり、2歳を迎え、そろそろ反抗期の兆しなのか、母親には中国語でのダダコネも始まっています。

10年後、この孫は12歳。三言語育ての結果もそろそろかたちを見せ始めている頃でしょう。そして、私は傘寿です。この期に及んで、CAJLEの行く末も是非見守りたいし「まだまだ娑婆にお邪魔したい、という望みを持つのも悪くはないな」などと、柄にもなく欲望がうずき始めています。

CAJLE 創立20周年おめでとうございます。そして、今後、ますますの健やかなご発展を心よりお祈り申し上げます。

寄稿

第19回全カナダ日本語弁論大会を振り返って

アルバータ大学高円宮日本教育・研究センター所長 下野 香織

第19回全カナダ日本語弁論大会は3月29日にアルバータ大学で開催された。全国7地区から20名が参加し、各部門とも内容・日本語力ともに非常にレベルの高い発表が多かった。学生たちが舞台上立ち、外国語である日本語で立派に発表する姿の背後には、ここに至るまでの練習と、その指導にあられた先生方の努力が感じられた。参加学生たちが

らのアンケート結果からも、全国大会を今後も継続していくことに大きな意味があることを再認識させられた。

去年のちょうど今頃に第18回全カナダ日本語弁論大会を終えた感想と反省などをこのニュースレターに書かせていただいた。去年は主催するにあたっての注意事項を中心に、今後大会を継続していく

ための提案を書かせていただいたわけだが、今年は二年連続して主催した経験ということで、去年は気づかなかった問題点をいくつか提示させていただきたい。そうすることで、弁論大会の存続のために教師である私たちがどのような認識を持つべきかを考えるための機会となれば幸いである。

一つ目に問題点としてあげたいのは、他大学の先生方（各地区大会の組織委員長の先生ならびに、全国大会参加学生の大学の先生方）との連絡の難しさである。現在、国際交流基金トロントのウェブサイトには各地区大会の連絡先がリストされているが、地区大会によっては組織委員会の先生の連絡先ではなく総領事館の文化担当の方の連絡先になっている。そのため、参加学生の情報など、一日でも早く入手を必要とする時にも4日、あるいは5日以上かかり、その結果、航空運賃が予算を大幅にオーバーすることになってしまった。

また、地区大会の日程設定も今回は問題になった。全国大会開催において一番時間がかかる場所は参加学生のためのフライト予約をすることなのであるが、特に遠くからの参加学生の飛行機は便数も少ないこともあり、2週間前の予約では安いチケットがとりにくい。同時に、飛行機の手配がすべて終わるまでほかの部分の予算が決まらないなどの不便もある。余裕を持って参加学生全員の飛行機を手配するためには、地区大会を全国大会の3週間前までに開催すべきであろう。あるいは、全国大会の主催者側が、出場手続き締め切りを3週間前あたりに設定するなどの方法もあるかと思う。

三つ目にあげたいのは、先生方、あるいは参加学生たちの全国大会の運営についての理解を深める必要があるということである。全国大会では7地区から21名が参加するわけだが、この一人一人にかかる費用はすべて、国際交流基金からの助成金と企

業団体からの寄付によってまかなわれている。予算内ですべての経費をまかなうためには、できるだけ安いフライトをさがして予約を入れていくわけだが、中には学生の期待に添えない場合もある。しかし、予約後に、学生が病気などでキャンセルするのは仕方ないとしても、今回は一名、飛行機のエドモントン到着時間が遅すぎるとの理由で苦情があり、結局キャンセルになった学生がいたことは、私ども主催者側としては非常に遺憾なことであった。しかも、払い戻しがなかったためこの1000ドル近くはまったく無駄になったわけである。

このように考えると、全国大会の存続のためには、去年このニュースレターに書かせていただいたような開催準備やアシスタントやボランティアの役割分担などのノウハウを共有していくことも大切だが、同時に、各参加大学の先生方の協力と理解を得ることの大切さを実感せずにはいられない。このことは、日程の設定にもかかわってくるであろうし、参加学生への指導にも反映されてくるのではないかと思う。かく言う私自身も実際に全国大会組織委員として開催準備にかかわるようになるまではこのようなことを実感することなくいたわけで、今振り返ると長年この大会を主催をなさったヨーク大学太田先生のご苦勞が身にしみる。

次回の全国大会は、2009年3月にオタワで開催される予定である。今年度は、第二十回大会という記念すべき大会であり、同時に日加外交80周年にもあたるわけで、日本大使館で行われるにこれ以上ふさわしい大会はないであろう。この機会に、私たち日本語教師一人一人が、全国大会の意義を再確認し、その存続のためにできることはなにかということ、主催者だけの問題としてではなく、全員の問題として考えるべきなのではないだろうか。

リレー随筆

外国人留学生の挑戦

——アカデミック・ディスコースの習得を考える——

名古屋大学准教授 池田 佳子

今回ニュースレターのリレー執筆の依頼をいただき、何について書こうかと考えた末、現在まだ漠然としているが将来的に研究対象として行きたいと考えているテーマについて書かせていただこうと思う。

2006年度の秋から名古屋大学に赴任し、第二言語習得概論、および言語を教授する立場にあるが、大学院の担当をしており、また所属している研究科は留学生の占める割合が非常に大きいこともあって、日本語によるアカデミック・ディスコースとは何か、それを駆使できる能力とはどのように身に付くのかということをよく考えるようになった。既存のアカデミック・ディスコースに関する研究は、従来テキスト言語学、社会言語学、対照語用論、コーパス言語学が取り扱う研究対象であったため、国内外共に学術的文章の作文や読解など「学術的リテラシー」に焦点を絞ったものが多かった。近年では学術環境で必要なコミュニケーション能力の育成にも視野が広がり、言語能力試験では測定することができない客観的・論理的思考力や表現力、明晰な指示言及能力、リサーチから得た知識の咀嚼力を養う実践授業の試みなどが報告されている。国内では、研究発表後の「質疑応答」の活動がもたらす批判的思考力の向上効果を考察した金(2006)、討論(李, 2005)、インタビュー(池田, 2004)などで必要な高レベルな口頭能力の考察などの例がある。

国外(特に欧米)では、大学における外国人ティーチング・アシスタント(International Teaching

Assistant)の増加という社会背景から、アカデミック・コミュニティの多様な言語活動の談話分析を行う研究が増えている。例えば、物理学という専門分野における学会討論の談話を研究した Ochs & Jacoby (1997)を始め、Young & Miller (2004)の米国大学で留学生の論文指導や補習を行うライティング・センターの談話の研究、Morita (2000)の研究発表及び質疑応答の場面での外国人留学生のパフォーマンスの考察などがその例としてあげられる。これらの研究は言語使用の分析だけに留まらず、その言語活動の参加者達が協働で構築していくアカデミック・ディスコースの実態を捕らえるものである。

どのようにこのアカデミック・ディスコースの習得過程を考察するのが思案のしどころだが、今のところ「言語に依る社会化(Language Socialization)」理論がこのアカデミック・ディスコースの研究にも応用できるのではと考えている。「言語に依る社会化」理論は Ochs (1984; 1988; 1996), Ochs & Schieffeline(1986)によって80年代に提唱され、以来この理論に賛同する研究者達が教育現場の談話研究のアプローチとして援用し成果を上げている。この理論では「社会化」は主に言語を媒体として起こるとされており、その過程は大きく分けて二通りあるとする。一つは言語を使用するための社会化であり、言語の使用規則を教える具体的な場面が焦点となる。もう一つは言語を通しての社会化であり、インターアクションを繰り返して

行う内に、その中に記号化された社会規範がそれとなく提示され、学習者が言語を習得すると同時にその社会規範も学んでいく過程を指す。

日本の大学院で教鞭を取っていく中で、大学院外国人留学生達のアカデミック・コミュニティーへの社会化のプロセスにはこの二つの過程が顕在していることに気が付いた。彼らにとって、日本の大学院というコンテキストは外国語である「日本語」の練達の間でもあり、さらには研究者・教育者の基盤となるアカデミック・ディスコースの習熟の間でもある。研究会・発表などの研究活動への参加、大学院授業の受講、指導教員とのオフィスアワーなどにおける言語活動を通して、彼らは「一学生」からアカデミック・ディスコースのレトリックや社会規範を知り活用できる「アカデミック・コミュニティーの成員」へと成長を遂げていかなければならない。彼らの成長を追うことで、習得過程を少しでも描写したいと思っている。実現するのはいつのことか、まだ未定ではあるが、構想を練る段階で得た知見が

読者の方々の興味をそそるものであったとしたら嬉しく思う。

さて、今回のニュースレターへのバトンは、トロント大学で講師をなさっている有森丈太郎さんにお渡しできることになりました。教育に、研究に、とご活躍なさっているので、どんなご報告をいただけるのが楽しみです。

執筆者のプロフィール

大阪府出身。2005-2006年度にトロント大学東アジア学科にて講師を務め、2006年度一現在は名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授。2007年5月にハワイ大学にて博士号を取得。専門は社会言語学、語用論、会話分析、談話分析、第二言語習得、異文化コミュニケーション学。現在日本のメディアに登場する政治家の言語使用と、国会審議中に議員達が織りなす多様な参与枠組みの形について執筆中。

活動報告

活動報告とこれからの活動案内

活動報告

ジャーナル CAJLE (大江都)

「ジャーナル CAJLE 第10号へ向けて、応募論文が3本あったが、残念ながら、採用論文は1本であった。編集委員会で慎重な討議の結果、今年度は通常とは内容、発行期日を変え、以下のような方針で進めたいと考えている。

- ①採用論文1本のほかに、依頼論文を2本(または3本)含める。
- ②7月発行ではなく12月発行を予定する。ている。

2008年度年次大会準備経過報告

別記「CAJLE2008への誘い」(CAJLE2008大会実行委員代表 小室リー郁子)をご参照ください。

理事会承認事項報告事項（清水道子）

2007年10月23日以降特記事項なし。

アトランティック部会活動報告（大江都）

2008年度は特に部会活動は行われなかったが、3月に、年中行事である「アトランティック・カナダ日本語弁論大会」が、ノバ・スコシア州のセント・メアリーズ大学で開催された。セント・メアリーズ大学、およびマウント・アリソン大学から、計13名の学生が参加し、スピーチを競った。今年は、参加校が少なく小規模な大会であったが、学生、教師の楽しい交流の場となった。来年の「第11回アトランティック・カナダ日本語弁論大会」は、ニュー・ブランズウィック州の州都フレデリクトンにあるセント・トーマス大学において開催される予定である。

オンタリオ部会活動報告（清水道子）

日本語教師研修活動として2008年3月2日、小室リー郁子先生（トロント大学日本語プログラム・コーディネーター）を講師に迎え、「話す力はどうか、どう測る？」をタイトルに、新移住者協会日本語プロジェクト（NJCA）主催、カナダ日本語教育振興会後援のもと、1時よりトロント日系文化会館にてワークショップを開催した。内容は、前回の『話し言葉教育を考える』に引き続き、教室で話し言葉を伸ばすための活動をどう取り上げるか、どんなことに注意をすればいいのか、適切なフィードバックを与えるための留意点等、約3時間近くにわたって実践的なワークショップが行われ4時に終了した。参加者28名「にほんごサークル」の展示販売もあり、休憩時には、教材検討や教師間の熱心な意見交換がなされ、楽しく盛会に終わった。

3月30日には、同じくNJCA主催、CAJLE後援のもとに、金谷武洋先生（モントリオール大学日本語科科长）による文法講演会「敬語の使い方と教え方に関する提言」を1時より4時まで、トロント日系文化会館にて開催した。好天に恵まれ、参加者48名、「にほんごサークル」の展示販売、教師間の意見交換など賑やかに行われ、ユーモアに富んだ楽しい講座だった。

今後もNJCAと協力して、活動を進める計画をしている。詳細は追って知らせる。

これからの活動案内**2008年度年次大会**

2008年度年次大会は、8月15日（金）から17日（日）までの3日間、国際交流基金の援助を得て、国際交流基金トロント日本文化センターにて開催します。例年通り、研究論文発表、教師研修会、情報交換会、教材展示販売、懇親会など、充実したプログラムを予定しています。また、18日（月）には、オプションツアー、ナイアガラ日帰り旅行を企画しています。詳細は、本号の2008年度年次大会準備経過報告「CAJLE2008へのお誘い」及び大会情報他ホームページ（<http://www.cajle.net>）等をご参照ください。

年次総会

年次大会2日目、2008年8月16日（土）午後5時15分より 国際交流基金日本文化センターにて年次総会を予定しています。今年は理事改選の年でもあり、多数のご参加をお待ちしています。詳細は、「2008年度年次総会ご案内」をご参照ください。

書記：清水道子・畔上ラム智子

BULLETIN BOARD

世界各地でご活躍の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。梅雨真っ只中の東京からご挨拶申し上げます。この夏は、北京でのオリンピック、北海道洞爺湖での G8 サミット等などと、しばし世界の視線がアジアに向けられているようですね。

CAJLE においては、今年は記念すべき創立二十周年の年。小室リー氏による「CAJLE2008 へのお誘い」にありますとおり、カナダ、日本、アメリカから講師をお招きし、素晴らしい年次大会が企画されています。基調講演、教師研修に加えパネル・ディスカッションを二種、そして共催で行う特別講演・・・とプログラムは隅々まで充実。創設者である初代会長の中島和子先生にもおいでいただき、ご挨拶を賜る予定です。もちろん多種の研究発表も予定されています。

本ニュースレターでも、創立二十周年を記念して特集記事が掲載されています。中島和子先生の「CAJLE20 周年記念によせて」では、バブル崩壊という厳しい背景の中、振興会の基盤づくりにご苦労されたこと、そして振興会発展の影に会内外の皆さまの多大な貢献があったこと……等などが説明されています。現在会長とはいえ新参である私は、これらを頭の下がる思いで読ませていただきました。また、創立当初より力を尽くされた鈴木美知子先生による「CAJLE の未来に寄せる期待」—— 貴重な先達のお声として、拝読いたしました。(男性会員の皆さま、このアドバイスに従い、張り切っていただくことにいたしましょう。)

さて、最後に一点、ご報告することがあります。この7月に、韓国の釜山において「日本語教育学世界大会2008」が開催される予定ですが、大会プログラムのひとつに「グローバル化時代に応えられる広域日本語教育のネットワーク作り」と題したシンポジウムがあります。世界各地域から9名の方々がパネリストとして参加しますが、私もその一人としてお招きいただきました。大役ですが、CAJLE 代表として最善を尽くす所存です。その結果は、また何かの折にご報告できるかと思えます。

それでは皆さま、八月の「創立二十周年記念年次大会」において、お目にかかれることを楽しみに。暑さに向かう折、引き続きのご健康とご活躍をお祈りいたしております。

会長：大江 都

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2008年6月～2009年5月

年会費：連絡先がカナダの場合…CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合…US\$40.00

上記以外の場合…US\$60.00 (いずれも郵送の場合は小切手または money order で)

申込必要事項：氏名(日本語およびローマ字)、現住所、電話およびファックス(自宅、職場の両方)、電子メールアドレス、所属機関。

申込先：Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)

P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

お問い合わせ：E-mail: mayu.takasaki@gmail.com (高崎)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。http://www.cajle.net)

編集部便り

★ 四月の中旬、一週間の JR パスでバックパック旅行をしてきました。金沢、能登和倉温泉、日本海沿いに新潟、秋田、弘前、青森浅虫温泉、それから一気に神戸、名古屋、信州の高遠、諏訪湖と桜前線を追いかけて、二十年来の夢をついに叶えることができました。満開をやや過ぎた時季でしたが、弘前城址公園の 2600 本余のソメイヨシノやシダレザクラの花弁が散り始めてお濠の水面に花筏を流しており、まるで友禅染の和服の裾模様、しばし夢酔い心地にひたりました。公園内にある日本最古のソメイヨシノはすでに樹齢 120 年をこえているそうで、その花弁は、若木のほんのりとした薄桃色とも、壮齢期の艶やかな桜色とも違って、淡く限りなく白に近い、深い味わいのある色あいでした。桜の古木がもつ年月を重ねた美しさに私達もあやかりたいものだと思います。それにしても、気が満ち溢れるような春を私はあと何度楽しめるのだろうか、こんな思いがふとよぎるのは年を取った証拠でしょうね。(竹井) ★ 今年のテーマの一つは「変わり行く日本語」であるが、楊先生の『『KY』な日本語』を読んでいささか度肝を抜かれた。コミュニケーションたる言語が、コミュニケーションの役を果たさない時代となったのかと思った。考えてみると日本語だけではない。英語でもそれを良く見かける。「RSVP」「ASAP」「DINK」などがその例だ。携帯メールの交換で、これがますますエスカレートされてきている。学内の委員会などの名は皆これを使っていて、当然皆が分かるものとしてメールが送られてくるが、アクロニムの苦手な私には皆目検討もつかない。「変わり行く日本語」をそのまま呆然とながめていて良いものか。今年度年次大会が多いに期待される。(ライリー) ★ いつもは楽しい話題をお届けしようと心がけているが、今度はかなりがっかりさせられた出来事を記しておこう。このニュースレターの原稿がほぼ集まり、これからゆっくり読もうと、編集作業において一番楽しい時間の最中に、大学の IT センターから意外なメールが届いた。私のホームページが何者かのハッカーに狙われ、そのすべての内容を即削除しなければならない、とのことだった。まさに一大事。何回かのやり取りを経て、ようやくただの削除ではなく、とりあえず別の場所に移して、こちらからアクセスできるように配慮してもらった。ファイルの中味を見てびっくりした。語学のドリル、学生活動の記録、古典の朗読など、約 2000 近くあるファイルの中のすべての HTML には、特定のサーバーにアクセスするためのコードが仕込まれた。いったい誰が、何のために、何の得があってやったのか、IT 責任者でさえ見当が付かない。随時更新していて、オリジナルファイルがかなり分散していて、どうやって手元のパソコンから一々見つけ出したらよいのか、ほとんど困った。最終的には IT の人が二ヶ月まえの時点のバックアップにアクセスさせてくれて、最悪の結果が避けられた。パソコンというバーチャルな環境なだけに、こまめにバックアップを取り、丁寧に分類して保管すべしと、まさに身に沁みるような教訓だった。(楊) ★ 「岩手・宮城内陸地震で被災された方々に、心からお見舞い申し上げます。」突然私事で恐縮ですが、慣れ親しんだコンピュータが何の前触れもなく壊れてしまいました。仕事から帰って仕事部屋へ行ってみると何だかとても居心地悪そうに机の上でしょんぼりして「ごめんなさい! 寿命です」。「こんなになるま気付かなかった私が悪かったわ。お疲れ様」と感謝。正直なところ、このニュースレターの編集が大幅に遅れていてやっと校正が始まったばかり。年次大会のことでフル稼働が必要だった矢先の出来事で、しばし呆然・・・落ち込んでしまいました。そうだ! 落ち込むのは早い、私には昨年夏に買って、放って置いたラップトップがあるじゃない。「VISTA」が嫌いで机の横に置いてあるじゃない。使い慣れた XP の魅力には勝てず修理に出しましたが、いつ直るのかちょっと分からず、我が子を入院させたような心境です。地震や編集長の災難と比べると些細なことなのですが、私にとっては大事件。いまでも VISTA でこの便りを書いています。我が子を裏切っている様なそんな気分です。6 月末から日本へ里帰り。久しぶりに娘(本当の)と日本の夏を楽しむ予定です。楽しみ!! (杉本)